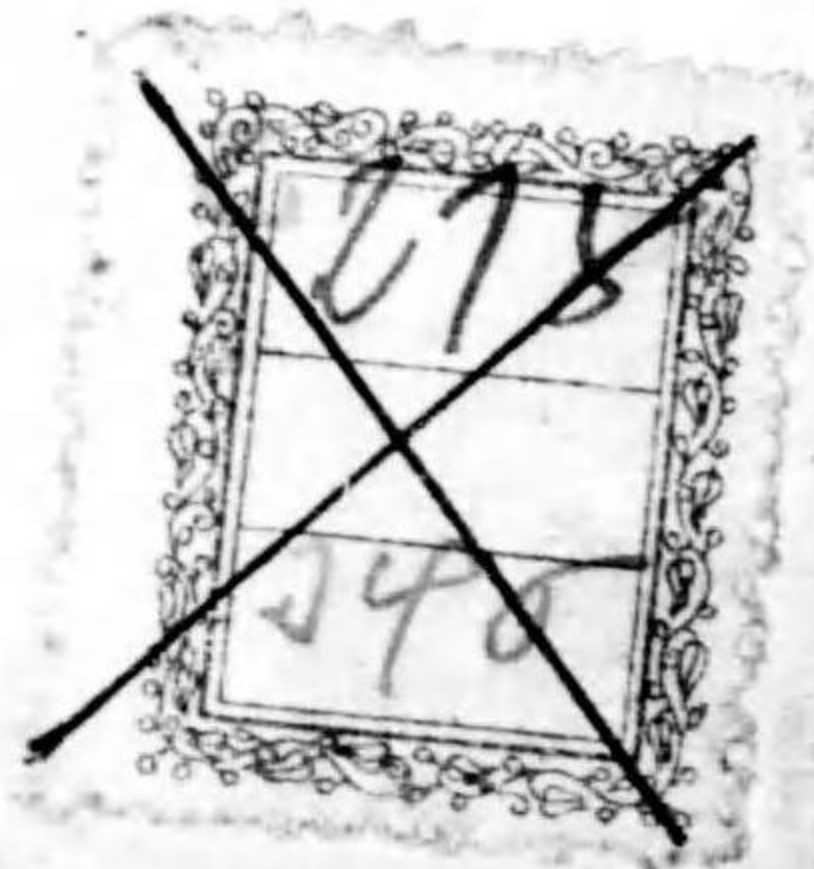


特 100

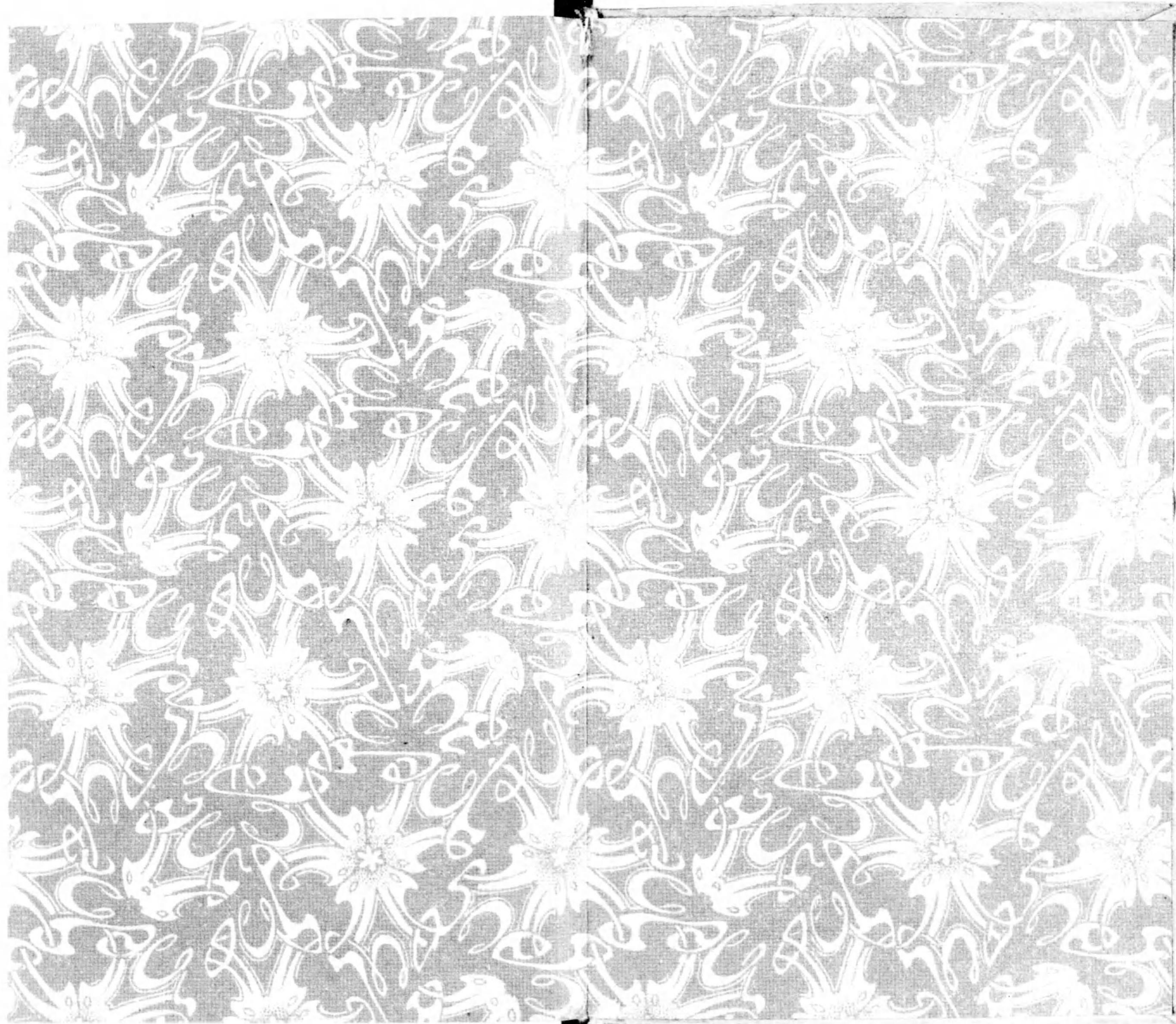
601

"FANTOM"
題改マドンア
グーエチ偵探大



始





特100
60/



エーヴ ■



江木権水著

大正
4. 7. 20
内交

GAUMONT

大探偵ヂユーヴ

(ゴーマン會社)

目次

第一編 ベルサム事件

生命はねえぞ	一
不思議の名刺	一
Gの頭文字	七
三個のトランク	三
兇漢の捕縛	九
殿かりなさい	二四
死に臨む刹那	二九
死刑・囚	三四
第二編 黒装束の人	四〇
手品のやうな速業	四六
果然！ 果然！	四七
覆面の流車強盗	五三
海岸の活劇	五八
焼木杭	六三

“FANTOMAS”

—Gaumont—

Fantomas, the Beltham Mystery.

CAST:—

Fantomas as Gurn.....M, Navarre.
 Detective Inspector Juve.....M, Breon.
 Fandor his assistance.....M, Melchior.
 Nibet, the prison Warder.....M, Node.
 Actor, Valgran.....M, Velber.
 Grand Duchess Beltham.....Mme, Renee Carl.
 Princess Demidove.Mlle, Jenne Faber.

Fantomas, the Man in Black.

CAST:—

Dr Chalecque, Lupar & the man in Black.
M, Navarre.
 Detective Inspector, Juve.....M, Bréon.
 Fandor, his assistance.....M, Melchior
 Grand Duchess Beltham.....Mme, Renee Carl.

迷宮の家	七
其處の警戒	八
毒の毒氣	九
悪魔の勝利	九
第三編 不思議の指紋	九
トンビに隠れた義手	九
古着屋の馬鹿爺	一〇
無實の罪	一〇
探偵長チユーヴ	一〇
探偵フアンダー	一〇
侯爵夫人ベルサム	一〇
兇賊フアントマ	一〇
看守ニーベ	一〇
俳優ベルグラン	一〇
貴族夫人デシトヴァ	一〇
ジョセヒン	一〇
美術家ジャック・ドロ	一〇
ブレオン氏	一〇
メルチア氏	一〇
レネ・カール夫人	一〇
ナヴァール氏	一〇
ノード氏	一〇
ボルハア氏	一〇
チエニ・ヘエバー嬢	一〇
イヴエット・アンドリオール嬢	一〇
アンドル・チユーグ	一〇

Josephin.....Mlle, Yvette André
yor of the Comedie
Francaise

Fantomas, thh Mysterious Finger-print.

CAST:—

Banker Nanteuil, the man in Brack
and Inspecton.M, Navarre.

Cranajour, an idiot & Detective Insqe-
cton Juve.M, Breon.

Journalist Fandor, his assistance.....M, Melchion.

Jacque Dollon.M, Andre Duge.

Tonmery, a marchand.M, Luity Morat.

Princess Sonia Danidoff & Jacque's

Sister Elisabetha.Mlle, Jeanne Fafer
of the Comedie
Francaise.



Grand Duchess BelthamMme, Renee Carl.

1 ルネ、カール夫人

(ベルサム夫人に扮す)

ゴイモンゴイモンの首惱女優しゆのうぢよゆうとして、又本篇の女主人公としてのルネ、カール夫人ふじんは、實に其重味と巧妙なるアートに於て完膚なきものである。

凄惨せいざんの氣も驚駭きやうがいの表情へいじやうも戀の熱情ねつじやうも宿命しゆくめいの嗟嘆さたんも、女性じやうせいの無耻むぢなる強みつよも、皆其重々しい肉體にくたいの一舉手一投足しやうに生じて來る。

貴族ベルサム夫人きぞくベルサムふじんの惡業あくごうを語るには夫人の餘りに巧みなる技巧てきにツクせんりつに戰慄せんりつするものである。



Detective Inspector Juve..... M, Breon



Fantomas as Gurn..... M, Navarre.

2 ナヴァール氏

(ファントマに扮す)

本篇の主人公として、全篇をして惨劇の血の痕たらしめ、兇悪の風貌と深刻なる藝風を以て悽慘の氣を充實するに、其驚くべき兇悪の理解を以てして居る。活劇の劇的價値を眞に或る程度まで高級に感ぜしめたる氏の偉大なる藝風を賞讃するものである

3 ブレオン氏

(大探偵デューヴに扮す)

眞率なる藝風！ 名探偵の外面的な苦心、又内面的の謀計と、省察力の効果に驚嘆せしめられる。
終始變幻、兇悪ファントマの足跡を追ふて馬鹿となり、紳士となり、装に心裡に巧みなる變装を行ふのである、其熟せる技巧や實に斯界の第一人者と云ふべきであらう。



4 死刑囚

「此舌の先のヒリツとする所が、まことに結構で……」など、入らない御世辭を云ふ。今まで色氣澤山に取持つて居たベルサム夫人の顔が、急に颯と變つた。ワリゲランはふらつき氣味に匍ひよつて、夫人の手を取らうとする途端に激しい眩暈がした。おやおやと云ひかけた時にはもう口が硬ばつて、睨が弛んで來た。夫人の顔には凄い微笑みが……



5 海岸の活劇

「これは油断ゆだんがならない！」

途端とたんに、耳を掠かすめて飛び來つた一彈。續いて諸々しよしよ方々うらうらに打ち出す盲めくらら彈は、刻々に兩探偵を危険きけんにする……賊の一隊は、呼子よびこの合圖と共に、樽と云ふ樽の寸隙あひまから、拳銃けんじゆの規ねらひをつけて一齊たらあがに立上つた。

はしがき

人間の好奇心を挑發する事が段々と猛烈になつてくる、あらゆる戦慄の材料と恐怖の種とを、生々しく眼前に打發けて、これでもか是でもかと思地わるく肉迫するのは、活動寫真を以て隨一とする。非科學的な異常事件や、ありふれた怪談もどきの脅威しでは、最早や近代人の心を捉へる事は出來ない。その眼にその魔痺した心に、尙ほ畏怖驚嘆すべき暗黒面——怪地獄の一大光景が現出するでなくしては、單に刹那の小さな好奇心を釣るに留まるであらう。

「フアントマ」は最も具體化したる近代人の驚愕である、遠くはユーゴの

探偵小説に驚いた人も、近くはジゴマに呆れた人も、此の「フアントマ」から與へられる程な心的打撃は恐らくなかつたらう。私は此の映畫の印象を描く上に尠なからず苦心した、と云ふのは、單に「見たまゝ」或は「冒險小説」に類する物語を避けたかつたからである。最も大なる感激の記録として、此の映畫の贏ち得た世界的な呼聲の、一つの反響を讀者に傳へたかつた。が併し私の拙ない寫生はその希望の多くに離反いてゐるだらう。「フアントマ」は今のところ全九篇、三十二卷から成つてゐる。本書に載せた分はその第一篇と二篇と第三篇の一部との九卷だが。構想の大と取材の奇とは、これだけでも、後篇の一大波瀾を暗示して尙は餘りあるではなからうか。

大探偵ヂューズ

第一 ベルサム事件

生命はねえぞ！

廣い／＼大都會の、死のやうな巴里の深夜の街を、何處からともなく疾走つて來た一臺の自動車が、宏壯なロイヤルホテルの玄関先に停つた。内から扉が開いて出て來たのは、黒色のボンネットに長いスカートを曳いたひとりの貴婦人であつた。

これは某伯爵の夫人で、二三日前マルセイユから出京て來て宿泊つてゐ

るホテルの一等客、明朝は二番列車で出發つ筈になつてゐたが、方々の招待宴に夜を徹して遅くなつたのだ。受付は夫人の姿を見ると、晝間銀行から届けて來た札束を渡して、

「十二萬五千フラン、何卒お調べを……」と云つた。併し夫人は無造作に札束を受取つて、その儘エレベーターに乗る人であつた。

七階目の廊下には、部屋附の女給仕が出迎へてゐる、夫人は襟巻を取つて渡しながら、

「留守中、何誰が來訪して？」と訊く。

「否え、何誰も……」

部屋に入つて、寐椅子に身體を投げかけると、二三日中の疲勞が一時に

湧いて出るやうな氣がした。被衣を脱ぎ、首飾りを外してそのふくよかな兩腕を給仕の肩に支へながら、寐衣に着換へに次の部屋に立つて行く……と入口にその姿が消へた途端、窓掛の蔭からギロリと鋭い眼が光つた。室の前後見澄してやがて現はした半身には、折目正しいモーニングが短かく刈つた鬚によく似合ひ、何處に一點非の打てぬ紳士風の男。だが訝しいのは女給仕も知らぬ間に、留守の室に隠れてゐた彼の行爲である。果然！彼は飛鳥の如くに卓の間をすり抜け、今し方夫人が十二萬五千圓の札束を藏つて行つた、その小箆笥の抽斗にと手をかけた。

抽斗が二三寸も滑つたかと思ふと、次の部屋からはもう夫人の出でくる氣勢がした。彼は爲損じたりと云はぬ狀に、身をかはしてもとの窓掛に逃

げ込んだ。

何も知らぬ夫人は給仕を先に寐ませて、自分は柔らかな寐衣に寛ぎながら、寐椅子の傍に近くと、半分滑り出た抽斗が眼に留つた。おや！ 先刻は確かに締めた筈、思ひ違ひか知らと札を調べて見たが、異状はない。夫人は胸なで下して椅子に靠れた。

その時背後に微かな足音がして、以前の怪しの男が忍び寄つたのである。それと夫人の氣着いた時はもう遅かつた。逃出す隙も發てる聲もその男の不思議な威壓に自由を失つて、夫人は唯だ戦々と慄へるばかり。

「ハ、ハ、ハ、」

と破れ鐘のやうな不氣味な嘲笑ひが起つた。

「何もそんなに恐がる事ありませんよ。侯爵夫人にわざ／＼お目にかゝりに来た者だ、秘密會見といふ奴さ、早朝は二番列車でお早いと云ふ事だから、留守中お待ち申しました……」

「お前さんは、一體何者です……失禮な、妾はお前さんなぞに用事はない……さつさと出て行かないと、ホテルの者を呼びますよ」

「夫人は蒼醒めて、切れ／＼にやつとそれだけ云つた。

「おつと……笑談じやない。私は何も怪しい者じやない、こんな者さ」と云ひながら、一葉の名刺を夫人に渡した。

夫人は、もしやと云ふ氣で名刺を受取つたが、裏表て何度翻して見てもタダの紙片！ 無記名の名刺！ そこが男の奸策で、夫人の注意を名刺に

惹付けて置きながら、彼の左手は又もや抽斗の中に延びて行つた。

「や、お前さん！ 何を」

夫人は狂氣のやうに男の腕に武者振りついた。男は右手で軽くあしらひながら、スル／＼と札束も、首飾も隠囊に押し込んで了つた。

「少し要り用があるからこれは貰つて行く。夫人！ 有難う……」

何といふ圖々しさであらう。彼は馴々しく夫人に接吻までして、そして云つた。

「だが夜明けまでは此のまゝでゐるんだぞ！ いゝか、聲でも發て、見ろ生命はねえぞ」

神出鬼没とは此の男のことだらう、尙も強搔みつかうとする夫人を蹴倒

して、身體をかはずともう大扉の外に消へて了つた。

不思議の名刺

階下では先刻から頻りに鈴が鳴つてゐる、ボーイは寐入り花を起されて有耶無耶にハンドルを廻した。エレベーターはそのまゝ上に昇つて行く……七階目、扉を開けると、今まで平蜘蛛のやうに壁に身を押し付けてゐた男が、矢庭にボーイをエレベーターの中に振伏せた。その中で何事があつたかは分らない、再び階下に降り切ると、ボーイは慌だしく中から轉び出た。「大變です、大變です……今、三十番のお客様のお部屋に強盗が入つたんです……私は警察に行つて参ります、番頭さん鍵を……」

と云ふ聲もしどろもどろ。

「何だ、強盗だ？ それは大變だ！」

受付の所にゐた支配人は、直ぐ鍵を取つて渡す、ボーイはそれを受取る
と、一散に玄關に驅出して行つた、が彼は本當のボーイであつたらうか？

此方は七階の夫人の部屋。

夫人は一時、腦がガンーとして何が何だか分らなかつた、段々氣が明瞭
してくると、賊の云つた最後の言葉だけが茫然残つてゐた。

「……聲でも發て、見ろ、生命はねえぞ！」

夜明けまで……浮かり聲は發てられない、どんな恐ろしい事になるかも知
れない、と思ふと、齒の根も顫ふ程の戦慄が起つて來た。

慥かに無記名だつた賊の遺した名刺に、程經つて不思議な文字が現はれ
た、見れば恐るべし、FANTOMASI フアントマ！ 今巴里全市を包んで、
非道殘忍な獨逸の飛行船よりも猶ほ怖れられてゐる、無類の兇賊フアント
マの名が、鮮やかに鈍染み出てゐるのであつた。

夫人は一と眸見ると、手脚が急に硬ばつたやうに、そのまゝ床の上に氣
絶れて了つた。

ホテルの内部は女給仕の時ならぬ叫聲に依つて、上を下をと騒ぎ出した。
その中夜も白々と明けかゝつたが、警察からはまだ何の消息もない。客の
一人は下りて來て、

「一體どうしたんだ、警察の方は？」

支配人も頭を捻りながら、

「ボーイが参りましたから、もう餘ッ程経つたんですが……」と云ふ。

エレベーターの中を調べると、警察に行つたと云ふボーイが、顔色を失つて倒れてゐる。總掛りで曳磨り出して、水を吞ましたり脊を叩いたりする中、やつと正氣附いたボーイは怪訝な顔をして何か思ひ出さうとしてゐた。

「……何でも七階までは知つてゐますが、それから……を、誰か飛込んで来た、そして俺の咽喉をしめつけた……」

エレベーターの中からは、夜會服一着と付け髭二個と鬘とが發見されたエレベーターの降りてくる僅か一分か二分の間に、人間を一人片付けて姿

を變へて出て来た賊の速業は、多くの人々の舌を捲かした。

電話に依つて警察官がやつて来たのは、それから間もなくであつた。一通り調べて引き上げると、夫人は落膽して暫らくは悪夢の迹を追ふやうな氣持であつた。其處に夫人を訪ねて来た人がある。

名刺を見ると、巴里警察附のヂューブと云ふ名高い探偵であつた。案内に連れて部屋に通つたヂューブは、その敏活な眼を八方に配つて、何事か領きながら夫人の傍に近寄つた。

「萬事お隠匿なく打明けて頂きたい……ふむ貴女が寐衣に着變へて出てくると、この抽斗が……成程、無記名の名刺……を一寸それを拜見」と云つた風に取調べた末、ヂューブ探偵は一方を屹と噴めて何か深く決心すると

ころがあつたらしい。

Gの頭文字

一旦警察に引上げた探偵デューブは、その片腕とも恃む少壯探偵フアンダーを連れて自分の家に歸つて来た。そして何事か秘密に評議を疑らしてゐた。

近頃兩探偵の頭を悩ましてゐる事件があつた、それは十日程前の出来事で、ルードベルサム侯爵の行衛が皆暮れ不明になつてゐた。警察側に對する社會の非難も大分あつて、その犯人が擧らなければ、一般警察權にも影響し名探偵デューブの名にも瑕がつかうと云ふ。それはベルサム夫人に依

つて提起された事件だが、併し烟眼なるデューブはその夫人にすら油斷を怠らないのであつた。

「探偵長、私は昨夜のホテルの犯人——即ちフロントマと、ベルサム侯爵との事件を引離して考へる事は出来ません。猶豫なく彼奴を引つ捉へる手配りをしたいと思ひます」

フアンダーは血氣にまかして逸り立つ。

「ま、待ち給へ、急いでは一代の損さ……」

とこんな時にも落着のいゝデューブは、洒落を云つた。其處へ警察署長から一通の手紙が来たが、それにはホテル事件に關することは少しもなかつた。行衛不明の侯爵は何者にか惨殺されてゐるらしい……徴候としては

然々と認めてある。

「さうだ、署長の考へは俺の意見と同じだ」

と唸きながら、何事かフアンダーと手筈を交し、やがてデューブは目立たぬ姿をして何處ともなく出て行つた。

彼の姿は間もなくベルサム侯爵の留守宅の門前に現はれた。侯爵はぬないが夫人がある筈である。取次のボーイが入つて行くと、尙ほ暫くは家の構へ、内外どことなく眼をつけた。樹深い植込に取巻かれた立派な五階建——人氣はなれた物寂びた庭にも、暗い窓々にも何となく陰氣な秘密の影が射してゐるやうに思はれた。

夫人のところには既に先客があつて、何ごとか密々と囁かれてゐた。先

客と云ふのは、近頃夫人の許に繁々出入をするR、C商會の番頭でグルンと云ふ若い男。夫人との間にどんな關係があるのか知らぬが、誰の眼にもタダの交際とは見へなかつた。今日も兩人は一個の椅子に體身を押付けて、さも馴々しく甘い言葉を囁いてゐる。其處にボーイが名刺を持つて入つて來た。ボーイの姿を見ると、兩人はバネ仕掛のやうに左右に飛び退く。

「まあ、デューブ。困つたところへ……」

成程困つたところに違ひない、侯爵夫人ともある者が、然かも良人は行衛不明——一説には慘殺されたとも噂されるその人の妻が、若い男を呼び入れてあるまじき爲體なのだもの……

「どうしませう、會ひませうか？」

「そりや會はにや向ふは探偵ですから、又どんな邪推をするか分りません。私は暫く次にゐませう」とは云つたが、グルンの顔にはなせか苦しい脂汗がにじんでゐた。

やがて探偵デューブはボーイの後から入つて來た。そして夫人に軽く挨拶をして、帽子を卓に置く、と其處には茶色の中折帽が一つ置かれてあつた。眼の慧い探偵はすぐその裏を翻して見た。裏の襞にはGといふ頭文字が大きく縫ひ取られてある。G! G! はてなと思ふ色を顔には出さず、何喰の顔をして夫人の傍に近寄つた。

「重ねくの御心配で、まことに御愁傷です。併しまだ侯爵が殺されたといふ證據も舉らないのですから、お力をお落しなすつてはいけません……」

「はい、もう毎日泣いてばかり居りますの」

「御尤もです」と探偵は夫人の顔に動く毛筋一つ見逃さず、「時に夫人、今何誰かゐらしつてゐましたか？」

「はい、否え……」と夫人は胸を突かれて嘘を云はうにも、探偵の眼の鋭く中折帽に注いでゐるのを認めて、口籠つた。「はい、一寸……」

「あ、さうですか……時に」とデューブは氣勢を轉じて、又「時に」を初める。

「侯爵御生前の——やこれは失禮、まだお死去と決つてもゐませんのに……」と云ひながらジロリと夫人の顔を眺め、「知人名簿と云つたやうなものがあれば、一寸拜見いたしたいものです」

「此處にございます」

と夫人は浮かりと机上から取つて渡す。ヂューブは手速くGの頁を繰つて行つた。Gの一番最後に、ある、ある……レグレル街百四十七番、グルン……

「有難う、時に此のグルンと云ふ方は、侯爵の御親友でいもあるんですか？」

何を調べるかと思へば意地悪く自分の情夫の名を……と夫人は悲しさで怒りとの混淆になつた反抗心を抱いて來た。

「さうです、親友……」しかしそれは侯爵ではなくて、自分の一番の親友——目睫を忍んだ男の名だよと、夫人は流石に不安な感じが胸一杯に騒

ぎ立つ。

「あ、さうですか。職掌柄立入つたお訊ねをして済みません。や、失禮しました」

ヂューブは聊か相手を翻弄する氣味で、急に椅子を立て別れを告げた。夫人の顔は一時に蒼醒めて、眸と額との間には暗い、恐怖の影が漂つてゐた。探偵はも一度その顔を見澄して、ついと部屋を出て行つた。

三個のトランク

次の部屋から様子を伺つてゐたグルンは、直ぐ探偵の後に出て來て、夫人の肩に手を置く。

「どうしました？ チューブの奴。」

夫人の杞憂は、グルンとの關係が探偵チューブに依つて暴露されはしないか、と云ふにある。併しグルンの方には他にまだく甚だしい不安と恐怖とがあつた。

「妾何の氣も着かず、知人名簿を見せてやりますと、貴方の住所番地すつかり書取つて行つたじやありませんか。妾どうしませう……」

「私の住所をですつて、そりやいかん、そりやいかん……」

と云ひながら、グルンは頭の毛を掻き撈つて室の中を歩き出した。して見ると彼は、何か探偵の眼を恐れるやうな暗い秘密を持つてゐるのであらうか？

やがて彼は手荒くペンを握んで、一通の書面を認ためた。それは運送會社の社長に宛てたもので、小生宅にある三個のトランクを、大至急ヨハンスーまで御輸送下され度云々」と云ふのである。

彼はその手紙を夫人に見せ、突如その耳に唇を押付けて何か囁いた。囁いた事は何であつたか？ 見る／＼夫人の顔が白蠟のやうに蒼醒めて行く……夫人の態度一つで、今にも掴みかゝつてその口を覆はんとする程のグルンの氣勢、所謂附け元氣が、今は早や萬事諦めてその顔に、あるまじき瘴惡陰忍な表情を浮べて來た時、彼は初めて安心の吐息を漏らした。噫、彼は果して如何なる鬼語を弄して夫人を誘惑し去つたのであらう？

ベルサム家を出て來た探偵チューブは、その足でレグレル街のグルンの

家を訪ねた。もとより留守を承知でやつて来たのだ。

波蘭種のお饒舌の下女が、問はれもしない事まで洗ひざらひ、探偵に話してくれる。

「え、グリンさん、さうですけれども十日許りも歸つていらつしやいませんですよ。本當にあの人は何が何だか譯が分りやしない、え、お金ですか？ お金は随分持つてるんでせう、だから情婦狂ひをなさるんですよ」

「ふ、ん」と探偵は笑つて、

「じや何日歸るか分らんのだな？」

「え、何日、本當にお氣の毒様ですわね」

「何氣の毒じやない、歸るまで待つとせう」

「でも今日か明日か分りませんか？」

「何に大抵、今日は歸るだらう、若し歸らなけりや、二日でも三日でも待つとせう。」

チユーブは何處までも落着いたもの。

「おや、おや……」

「おい、此のトランクは誰のだ？ グリンさんのだ、一體何日持つて来たんだ？」

とチユーブはトランクの傍に寄つた。嚴重に縛つた旅行鞆が三個、轉がしてある。そこは抜目のない探偵の眼、何狀黙過せんや。

「え、え、それは一週間程一寸歸つてゐらした時、お持ちでしたよ」

「ふむ、一週間まへ……」と探偵は鸚鵡返しに何か呑込んで、その鞆の角をコツ／＼と叩いた。そしてその上に馬乗りにつき、棹杆でも動かぬと云ふ見栄をした。

すると急に表の方が騒がしくなつた。鍵穴から覗いて見ると運送屋の足が車を曳込んだのである。

兇漢の捕縛

人足共は要捨もなくその旅行鞆に手をかけた。仲仕が生業、慣れたもので瓢と肩に擔ぐともう外に持つて出ようとする。

「おいこら、一寸待て！」

と突如に探偵が呼びかけた。

「何でえ、待てがどうしたと？」

氣の荒い奴、すぐもう巻舌だ。

「その鞆を持つて出る事はならん！」

「何だと手前の荷物じゃあるめえし……此處にちやんと、御本人様のお手紙があるんでえ、目玉かつぼじいてよく拜見しろい！」

受取つた手紙は、例のグルンの筆跡。「大至急ヨハンスーまで御輸送下され度云々」と書いてある。

「此の手紙があるから、尙ほ持つて行く事はならん！」

「おや／＼コン畜生！」と云ひながら、一人は交番の巡査を呼びに行つた。

説諭でもして貰ふ氣だらう」

やつて来た巡査に、探偵の名刺を見せる。二夕言三言耳打をされるとその巡査はくるりと向き直つて、

「こりや、貴様達ア此處に居る事アならん！」

と怒鳴つて。

「探偵と巡査とはその後で、鞆を明るみに轉がし出した。警官の持つ鍵は幽霊鍵と云ふ、すぐピタリと填つて錠前が外れた。内部には何が入つてゐたらう？ 一と眼見た巡査はアツと云つて顔を押へる。その内部には、年の頃四十前後、人骨骨格卑しからの髻の紳士が咽喉を締めつけられて死んでゐた。

デューブは早速被衣の裏を調べた。内隠囊にR、Bと云ふ頭文字の縫ひ取りがしてあつた。R、B、Rはルード、Bはベルサムでなくて誰だらう。探偵は警察に巡査を急派した。「ベルサム事件の犯人明瞭せり。但し手入は二時間後」と云ふ報告、これはグルンが夜に入らなければベルサム家を出ないと知つたからである。

デューブ探偵は、呆れ返つてゐる下女を追ひ遣つて、家宅搜索に取掛つた。第一に手に入れたのは百枚ばかりの名刺、裏表て無記名で、例のローヤルホテルに賊の遺して行つたものと同型である、呼吸をかけるるとマザ／＼と現はれた文字は恐るべし彼のフロントマ！

して見るとグルンとフロントマとは同一人であつたかとは、誰しも先づ

想像に浮ぶところ。憐れなるはそのフアントマに籠絡されてゐる、貴婦人ベルサムの運命である。併し彼女とても、その地位と名譽とを犠牲にして不義を働く程の女だから、フアントマに誘惑されない前から、一人前——いや稀世の大毒婦だつたのかも知れない。

ヂユーブ探偵の想像した通り、グルンのフアントマはその身に迫つてゐる危険を知つて、晝間はベルサム家に隠れてゐた。夜も更けて植込に鳴く虫の音も繁かつた。その音を踏んでフアントマは密そり裏門に近寄つたが折柄月も隠れて見透かす街道に人影もなき午後十一時三十分！

豫め手を分けて、邸の前後固めてゐた警官は、忍び出たフアントマの背後から、「御用！」と云つて躍りかゝつた。彼は前後左右に警められて警

察にと曳かれて行く人である。

一旦情夫を送り出したベルサム夫人は、裏門の方に當つて騒がしい人聲を聴つけた。さてはと躍る胸を押へながら、二階の窓を細目に開けて見透かせば、夜眼にもしかとフアントマの警められて行く姿！

「あゝどうしよう……………」

と流石女氣の、胸迫つて夫人はそのまま泣き倒れる。

嚴かりなさい！

フアントマの取調べは進んだ、事件が擴大すると共に、フアントマの情婦としてのベルサム夫人が罪を問はれずに済む筈がない。併しよく／＼悪

運の強い女と見へて、證據不充分的の廉を以て、彼女だけは放免された。そしてフロントマは死刑の宣告を受けた。

巴里の場末、別世界に嚴めしく取繞らした煉瓦の高塀こそ、あらゆる罪人を收容する恐ろしい監獄である。塀の内には轟々と高い樹立の繁りが屋根を覆ふてゐるが、その枝から射す太陽は、麗はしい幸福に満ちた光りを囚人の群れに落すことは決してすまい。潜びやかな月の光りさへ、此處ばかりには濕つた暗い影となつて照るのである。その月のどんよりと曇つた或る深夜すぎの事、一臺の自動車が塀に添つて音もなく過ぎかゝつた。其處に、靴音を響かして外を警めて歩いてゐる看守の姿があつた。びたりと停つた自動車の窓から、その看守を呼びかけた者がある。

「ちよいとベリーさん、貴方ベリーさんでせう？」

「おや俺の名を？ おや〜透き徹るやうな女の聲で……看守は驚くと云ふよりも、寧ろその耳を疑つて恐々自動車に近づいた。」

「妾、よく貴方を知つてるのよ。ちよつと耳を……あら、じや一寸此處に入つてゐらつしやらない事？」

「實際こんなことがあり得べきだらうか？ とまで看守のベリーはひた呆れに呆れながらも、美しい女に斯くまで馴々しく呼び留められたのが餘程嬉しかつたに違ひない。」

「外じや話が出来ないわ」と美人は云ふ。とうとう彼は自動車の内に引つ張り込まれて了つた。

その呼び込んだ美人は、誰あらう、彼のベルサム夫人なのであつた、何處で調べたのか看守の名まで臆へて来て、大膽にも何事かを監獄に近く目算もうとする、彼女は仲々の凄腕と云はなければならぬ。

夫人は六百フランで遂に看守を買収して了つた、自分ながら金の効き目には驚くほどだつた。看守は夫人の名刺を、死刑囚の大罪人フアントマに密そり手渡しする事を約束して懐中を暖かくして自動車から出た。

彼はやがて監獄をひとりで入りつた。フアントマ一人の爲にその監房を見張つてゐる彼の相棒は、思ひ掛けもないお金儲けの相談を受けたりそりやいゝ、構はん。山分けにしても三百フランだと直ぐ賛成した。やがてペリーは扉を開けてフアントマの監房に入りつて行つた。灰色の石

の壁、僅かに外の光りを洩れる鐵格子の填つた小窓、それに鐵の寢臺が一個、あはれ大悪漢のフアントマも、翼を抜かれた荒鷲のやうに、力なく寢臺の上に倒れてゐたが、扉が開いたので起上ると、看守は何やら目顔で教へながら背後向きになつて、一枚の名刺を渡した。それがベルサム夫人からのである事は直ぐ分つた。名刺の表てには、唯だ一句、

嚴かりなさい！

と認めてあるばかり。しかし辭短かく意味の深いその一句「嚴かりなさい！」とは一體何の事だらう、唯だ單に氣を勵ます爲か？ いや／＼もつと他に重大な意味がなければならぬ。フアントマの片頬にはやがて陰忍な微笑が浮んだ。

此の看守が既に夫人の掌中の者ならば、與するに易しとフロントマは、
 「實は自分はこの夫人に一萬フランの金を預けてある、どうせ死刑になる
 身體だから、そのお金を貴方に上げたい。どうかあの夫人に一と眼會はし
 て下さらんか」と、これもお金で釣らうとする。

死刑囚を連れ出す、これは容易ならぬ問題だが、一萬フランには一寸考
 へさせられる。ベリーは、「少し待つて貰はう」と云つて、廊下に出て相棒
 と又相談をした。結局話が纏つたと見へて、又入つて来た。

「よろしい、明夜三時に連れて出てやる」

死に臨む刹那

盜賊の上前をはねるとは、此の事だらう。二人の看守は一萬フランに眼
 が眩んで、法規を破つて、フロントマを翌日の眞夜中に監獄前のカフェー
 まで連れ出す事にした。喜んだのはベルサム夫人、その翌朝は、一萬フラ
 ンの金勘定に忙殺されたが、そのお金が何處にどうして使はれたかは、夜
 になつてから漸つと判明した。夫人は部屋に閉籠つて、拳銃だの爆弾だの
 といふ、恐ろしいものをまさかの用意にととのへてゐた。

その頃巴里の小劇場に評判のいゝワリグラムといふ人氣役者は、變装の
 妙を以て名高かつた。いづれ小芝居を打つて廻る俳優だから、際物や場當
 りでやんやと云はれてゐるに過ぎない。併し變相だけはお手の物で、これ
 には一流の名優も及ぶまいと専ばら噂さゝれてゐる。

ところが、此の二三日巴里全市の好奇心は、彼の稀代の兇漢フアントマの逮捕、及びその死刑といふ事に蒐つて、素張らしい人氣である。寄ると觸るとその話で持切つてゐる。際物師のワリグラム、好機會御座ンなれと早速舞臺にかけたのがフアントマ劇、「死に臨む刹那」と云ふのである。これが又評判になつた。

今しもワリグラムは、新聞に出たフアントマの囚人姿を参考として、精と顔を似せて行つた。鬘を冠つた頭の後ろ恰好、髻の具合、眉に寄る皺の癖まで巧みに取つて、ためつすかめつ鏡に向つて顔を化粧へてゐると、舞臺監督が来て、「割れるやうな入りです、何分お早く」と催促する。幕は開いた。小規模のオペラ劇場で、階上、階下も満員である。舞臺は

即ち、別世界なる巴里監獄の牢屋の一部を示し、正面稍々下手寄りに寢臺一個、入口は下手に一個、その他何も無い、流石大兇賊のフアントマも、天命を知つて、最後の祝福を神に祈り、覺悟の眞妙なるところを見せると云ふ。ワリグラムの技藝神に入つて、見る者は感に打たれて溜め息を吐いた。

小劇場の事だから特等席と云つても正面に棧敷が二つ割つてあるばかり、その一つは四人連れの紳士で買切となつてゐる。今一つのボックス全部を占領して、先刻から瞬きもせず舞臺を覗めてゐる一人の貴婦人がある。黒瞳勝の、狭い額に小皺の寄る、何處か見たやうな顔立だ……その時舞臺には、警察官、立合人などが多勢入つて来て、フアントマを刑場に連れ

て行かうとする。フロントマはそれらの、人に圍まれながら跪いて天に祈る……といふところで幕が降りた。

喝采の呼び聲に、幕は再び掲げられ、例に依つて俳優としてのワリグラムの挨拶がある。それが二三度繰り返されると、いよいよ打出しとなつた。すると特等席の貴婦人は、何と思つたか手帳を一枚裂いて、手紙を書いた。

……午後二時を期し、別世界三十二番カフェエブロードまでお出で下され度、但し今夜の扮装のまゝにて願上候……といふ文言。

さては此の貴婦人は例のベルサム夫人であつたのだ。芝居見物といふのが抑々暢氣すぎる所へ、役者と二時に會ふ約束をするのは一體どうした譯

か？ 三時にはフロントマに會はねばならないではないか——がそこは夫人の事だから穴勝ち浮氣筋ばかりでもあるまい、何か又所思があるのかも知らぬ。

その手紙は女ボーイに依つて、ワリグラムの樂屋に運ばれた。ワリグラムの機嫌は大抵でない。俺の技藝に感心して、あの貴婦人が呼んでくれると云ふのか？ だが待てよ、別世界のカフェエとは氣が利かぬ……いやいや俺が一流の俳優でなく、向ふが地位のある婦人だから、ワザと人眼につかぬ所を選んだに違ひない……など、自分勝手に想像して、早速囚人姿の扮装の上に、深々とマントを被つて劇場の裏門から飛び出した。外は間と寂れ渡つた大都の草木も眠るといふ時刻！

死刑囚の身替

一萬圓の鼻薬は確かに効いた。

二人の看守に左右を警られながら、監獄の裏門から密そり出して貰つたフロントマは、人眼にもつかずカフェエープロードの二階に導かれた。其處には先刻からベルサム夫人が人待顔に頬杖をついて、胸を湧々させてゐた。幾ら毒婦でもその情夫の惨めな囚人姿を見た刹那には、はたと胸が潰れて碌々口も利けなかつた。その胸に顔を埋めて正體もなく咽び泣くのであつた。

看守は勢ひ粹を利かしてやらない譯に行かない、十五分だけ面談を許し

てやると云つて、次の部屋に引取つた。

夫人は卓上の茶道具を指して、

「此の角砂糖には痺れ薬が入れてあるんです、貴方を救ひ出したばかりに罪な仕事もするんですよ」と云つた。

「ふん、看守を殺つ付けるのかい？」

「否え、貴方の身替りがちやんと拵へてあるんですよ。まあ見てゐらつしやい」

やがてフロントマは窓掛の蔭にその姿を隠した。夫人は立つて反對の側の扉を開けた。入つて来たのは例の俳優ワリグラム、今夜の扮装のまゝでやつて来たから、眞物のフロントマの速業かとも思はれる。

藝人の常として、腰も低く如才なく愛想を振り蒔いて、與へられた椅子に着くが早いのか、二三遍お辭儀をした。

夫人は瞳に媚を含んで、

「實はもつと立派な料理屋に御案内がしたかつたのですけれど、ねえ……人の口が煩いものだから、いゝでせう、我慢して頂戴な……」

「いーえ、滅相などういたしまして……」

「あら、そんなに堅くなるもんじやなくつてよ、珈琲いかい、一つ差上げませう……ねえいゝでせう」

ワリグラムはすつかり烟りに巻かれて了つた。侷められるまゝに角砂糖を取つて、一つポトリと珈琲の中に落す……その角砂糖！ 何も知らぬワ

リグラムは、上下掻き廻して一口呑み干した。仔細に氣を着けたら、シヤリと、齒に軌んだかも知れないが、ワリグラムは唯だもう悦に入つて、此の舌先のピリツとする所が、まことに結構で……」などゝ入らないお世辭を云ふ。

今までは色氣澤山に取持つてゐた、ベルサム夫人の顔が、急に此時颯と變つた。ワリグラムはそんな事とは知らず、ふらつき氣味に匍ひ寄つて夫人の手を取らうとする……途端に激しい眩暈がした。おや、おやと云ひかけた時にはもう口が硬ばつて、臉がだらしもなく弛んで來た。夫人の顔には凄い微笑が浮ぶ……其處に扉を開けて看守が入つて來た。

「こらくもう十五分だ」

夫人の所思通りワリグラムは、フアントマの身代りに立たせられて、要捨もなく左右から外に引出される。「人違ひだ」とも云へない、口も身體も痺れ切つて了つたのだ。

「それじゃ貴方、心残りのないやうに……」

夫人は何處までも毒婦の型で行く、此の位やつたら誰もかつがれると思ふ者はあるまい。

後には旨く行つたと悪漢毒婦、笑を交して無事を喜んだ。拳銃も爆弾も役に立てないで済んだのだ。本来ならば足元の明るい中に逃げ出すのだがよく／＼膽の野太い彼等は、夜明けの死刑執行を確めてから逃げ出した。いやがてその中夜が明けかゝつた、監獄からは起床喇叭が鳴り出した。

カフェーの二階の窓を細目にあけて見れば、手に取るやうに獄内の状が見透かされる。

さて身代りのフアントマはどうなつたか？ 午前四時死刑執行と決つて

ある、その十分程前に引出されたワリグラムは、まだ痺れ薬が醒めてゐなかつたので、掛りの警察官の前に出ても唯だ顔を鳴らして何か云ひたげにしてゐるばかり。いくら極悪の死刑囚でも、愈々執行となる間際には恐怖と諦めとのために、満足に口の利ける奴はない。

「大兇賊も殺される時は人並だ」

と一人の警官が云つた。やがて教誨師がその前に立つて神の御前に最後の懺悔をせよと説聞かす、その祈禱の聲が獄舎の冷めたい壁の上に慄へて

行つた時、

「待て、これは人違だ！」と、前を掻き分けて現はれたのは名探偵ヂューヴであつた。彼の爛々たる眼光は早くも罪人のフロントマでない事を看破した。人々は唯だ茫然として口を噤んだ。

逸早くワリグラムの鬘と付け髭とをかなぐり落したヂューヴ探偵の眼に云ひ様の無い無念さがあつた。彼は唇を噛んで、

「噫、逃がして了つたか！」

と眼を一方に据へて暫らくは無言であつた。

第二 黒装束の人

手品のやうな速業

近頃マルバツハ街の十二番に、米國新歸朝のシャルカと云ふ醫學博士が棲んでゐる。その血統も米國人だと云ふ噂さであつた。此の博士の周圍にそれとなく眼をつけたのは探偵ヂューヴで、日頃の彼の行動と云ひ、取分け疑問の焼點となるのは、最近博士邸に擡つた一つの事件が彼を益々不利益にした。

或る日ヂューヴの家に来合した少壯探偵ファンダーは、そのシャルカ博士に對する自分の意見をヂューヴに話し、

「博士だか何だか分つたものじやありませんよ、米國から歸つて來たと云

ふにも疑ふべき點が澤山あるんだから、寧ろ表沙汰にして引つ括つて了つたらどんなものですか？」

「まあ、待ち給へ、犯罪の真相は表面に現はれるものでない、よしんば博士が怪しいとした所で博士一人引つ括る許りじや、罪惡の根柢を掃蕩する譯に行かないさ。充分裏面に立入つて探るんだ、所謂一網にして萬賊を捉へるのが、我々の任務さ」

ヂューヴは、その思慮深く湛へた黒瞳がちの眼に言外の意味を藏して云つた。

「これを読んで見給へ」

出された一通の書簡をファンダーが受取つて披いて見ると、警察署長か

らヂューヴに宛てたものだつた。

……既に貴下も御承知の如く、彼シャルカ博士は最も疑問とすべき人物なり。未だ真相を捉へ得ずと雖も、一週間前博士の旅行不在中博士邸に、死骸の発見されし訴へは博士の家人に依つて提起されあり。のみならず同邸にベルサム夫人に似たる婦人を見たりと傳ふる者あり。貴下これを如何とか見る？ 博士は既に歸宅せる由然るに事件はその儘となつて湮没し去らむとする如き觀あり、貴下向後博士邸を踪跡して、よくその真相を闡明にせられむ事を。

ファンダーも此の書簡を読み終ると、暫らく腕を組んで思案した。

彼等二人の探偵は、折角捉へて死刑とまで漕ぎつけた兇賊ファントマの

逸走以來尠なからず、功名心を燃やしてゐるのである。凡そ彼等の眼光に觸れたもので、何かな参考となるものを看過すやうな事はない。殊にシャルカ博士には充分の疑點があるのである。

それから一週間といふものは、博士邸の周圍にいつも二人の姿が影のやうに隠現した。或る時は労働者風を装ひ、商人に化け、紳士に變り、苦心慘憺して手を盡したが少しの證跡も擧げることが出来ない。

すると或る日の事、シャルカ博士は自動車に乗つて何處かへ出掛けて行つた。それと二人の探偵は、矢張り自動車で見へ隠れに跡を追つた。先の自動車は市街公園の入口の前に停つたが、出て来たのは脊廣服に中折といふ商人體の男で、確か乗つた時には美髯を蓄へたフロツク姿の博士に相

違なかつたのだが……探偵は顔を見合せたが……僅か十町ばかりの間に自動車の間違へる筈もない。二人は何やら打合せをして、その商人體の男を跟けて来た。それとも知らず、彼はポケットに手を突つ込んで、急いで公園の並木の下を通り抜けた。

すると、先刻から白樺の木蔭に人待顔に立つてゐる、下婢風の女があつた、更紗の安ッぽい臺所着を着て、粗末な束ね髪を風に吹かせて前後見廻してゐたが、以前の不思議な男を見かけると、眼を外して木蔭から少し身を引いた。男は何氣なくそこを通り過ぎた。とその瞬間に手品のやうな速度が、二人の間に行はれた。女の手から男の服の隠囊へ、最も敏捷に巧みに紙片が飛んで行つた。そして二人は左右に別れて了つた。

「おや、何だか變だつたね」とヂューヴはフアンダーの耳に囁いた。
 「あの女も怪しい、手分をして二人を尾行して見たら、何か又手掛りがあるかも知れない」

かう云つてヂューヴは男の跡を追ひ、フアンダーは女を尾行て行く事になつた。

果 然！ 果 然！

男はもとの自働車の蔭に歸つて、隠囊から例の紙片を握み出して讀んだ。
 「今日いよく實行します、R P 商會の主人はあれ以來すつかり私の手管に掛つてゐますから、きつと自由になります。午後四時、レオール停車場

場で會見の筈、十分準備して下さい……」と書いてあつた。

私の手管とは一體何の事？ 十分準備しろとは何の意味？

男はニヤリと笑つて、そのまゝ自働車に飛乗つた。がその瞬間窓から顔を出して後ろを見たのは、單に通行人を注意したのか、それとも彼の跡を規つてゐるヂューヴ探偵に既に氣が着いてゐたのか、それは分らない。

やがて自働車は疾走した。表町から裏通りへ抜け、又大通りに現はれ、露地に這入り、頗る方向が曖昧である。併しレオール停車場の方に近づいて行きつゝある事は確かだ。するとその後から矢張りヂューヴ探偵の自働車が同じやうに疾つてゐた。丁度、探偵の自働車がとある物靜かな裏町に追つ驅けて入つた時に、その邊をウロ附いてゐた労働者風の一人の男が、

突如自動車いきなりじどうしゃの背後はいごに飛び着といた。探偵たんていの方はそんな事ことは一向いっかう知らない、男をとこは大膽だいたんにも燕臂えんびを延のばして、鋭利えいりなメスを廻轉くわいてんしてゐるタイヤの角かどに觸ふれた。そしてそのまま、飛下とびおりて姿すがたを消けした。忽ちタイヤは破やぶれて運轉うんてんが停とまつて了しまつた。

探偵たんていも運轉手うんてんしゅも、驚おどろいて調しらべて見みると此この有様ありさま。地團太ぢだんたを踏ふんだが既すでに時機じきを逸いつしたのである。探偵たんていは後うしろを見返みかへりながら、殘念ざんねんにもアトに引ひつ返かへした。

此方こちらはフアンダー探偵たんていは何處どこまでも女をんなを尾行つけて行ゆくと、一向いっかう氣きの着つかない様子やうすで反身そりみになつて女をんなは町まちを歩あるいて行ゆく。その物腰ものこし恰好かつかう、決けつして下婢げびよの型タイプでない。

55 黒装束の人の人

やがて女をんなは地下電車てんしやの停留場ていりゅうじやうへ階段かいだんを下くだりて行ゆく、折柄せりから來合まあした電車てんしやに飛び乗のりつた時ときには、フアンダーも辛からふじて乗込のりこんだ。電車てんしやの中なかでも彼かれは一流りゆうの觀察眼くわんさつがんを働はたらかしてゐた。次つぎの停留場ていりゅうじやうで上あがつた女をんなはとある大通りおほどほの宏壯かうさうな料理屋れうりやの中なかに、案内あんないもなくスタ〜と入はいつて行いつた。

無論むろんその風姿みなりから云いつて、其店せとのお客きやくとは見みへない。さうかと云いつて、其店せとの召仕めしつかひとも思おもはれない……丁度ちやうど通り一つ隔へだて、入口いりぐちの對向ひかひに一軒けんのカフェーがある、フアンダーは見透みとほしの自由じゆうな位置いちに椅子いすを構かまへて、珈琲こーひを命めいじながら、料理屋れうりやの方ほうを注ちゆう意いしてゐた。

探偵長たんていちやう！ 予よは彼かれの奇怪きくわいなる女性にょせいを尾行びかうして、今いま××街かいの一珈琲店いっかうひてんにあり。彼女かのぢよは既すでに袋ふくろの鼠ねづみの如ごとし、後刻ごこく好結果かうけつを齎もたらして、歸署きしよし得うるを喜よろこ

ぶ。

フアンダー

彼はヂューツに宛てた此の短かい手紙を、その儘隠囊に收めてふと通りの方を眺めた。すると、果然！ 果然！ 今しも料理店の入口を何氣なく出て来た一人の貴婦人は、身に流行の美服を纏ひボンネットを傾けて心持ち顔を隠してゐるけれど、紛れもない以前の下婢と同一人である。

フアンダーは締めた！ と思つた。

又しても尾行は續けられた。女の出掛けた先は、喧騒なるレオール停車場の一等待合室であつた。其處には、年齢五十幾歳とも見へる老紳士が、鱷皮の小鞆を脇に抱へ、大兵肥満の身體を揺りながら、遠くから女の姿を見かけて莞爾ついでゐた。女は近づいて來ると艶然品を粧つて、老紳士の

手を執つた。此の紳士は、怪しの男が公園で女から受取つた手紙の、「R P 商會の主人」でなくて誰だらう。そして又、紳士を「手管にかけて」翻弄せむとしてゐる此の女は何者だらう。恐らく何ごとか秘密の伏在してゐる事は朋瞭である。

フアンダーはブラットフォームの柱の蔭から、瞬きもせず彼等の有様を眺めてゐた。その中發車時間が近づいたと見へて、鈴が鳴り出す。女は紳士を急ぎ突つて、汽車に乗込んだ。彼等は一等室の客である。するとその以前から汽車の周圍を徘徊してゐた一群の旅客は、何か眼交せをしながら同時に乗込んだ。フアンダーも遅れずと乗つたが、同室では都合が悪いので態と二等室に座を占めて時々廊下に出ては一等室の内部を隙見した。が彼

は餘り室内の女にのみ氣を取られて、廊下をウロ附いてゐる一群れの男を怪まなかつた。

覆面の汽車強盜

一等室では、熱い、焔のやうな顔と顔とを押付けて、甘い戀が語られてゐる。RP商會の主人はすつかり女の擒虜となつて、その細い眼を益々紙屑のやうにして悦に入つてゐるのだ。これに對して女の擒蹤活殺はまことに手に入つたもので、盛んに、「貴方や……」を連發する。

「夫人が亡なつてから、貴方本當にお獨身なの？ まあ感心だわねえ……それで妾をその後に入れて下さるの？ さう、まあ嬉しい！」

キユツと手の甲を抓られて、老紳士は大口を開いて、だらしもなく笑ひ出す。

「さうしたら妾、どんな事でもして貴方の機嫌を取つてよ。貴方何がお好き？ 妾コ、アを拵へるのがそりや上手よ、妾の拵へたコ、アはどんなに旨しいでせう」

「ふむ、さうかい。私は又コ、アが大好きなんだ。コ、アと首ツ引でなけりや仕事が出来んよ、俺は。ハ、ハ、ハ、」

「さうまあ、頼もしいわねえ……」

女の柔らかな腕は、老紳士の首に蛇のやうに絡んで来た……

汽車は、巴里から早や數哩を離れて、寂しい山間に差かゝつた。隧道を

出て、三十度の急勾配を上つて行くと、汽車は段々徐行を初めた。その時今迄廊下を徘徊してゐた男の一人は、彼等の乗つてゐる最後の客車の扉を開けて出て、残らず鎖を外して了つた。見る／＼前の客車との間は次第に隔たつて行く……途端に登音を擾して一等室に闖入して来た一群がある。呀！と驚く老紳士の鼻頭に、覆面の男が拳銃を突つけて「手を舉げろ！」と云つた。手を舉げたところを、他の奴が隠囊残らず掻き廻して、袂裏まで取上げて了つた。

一方フアンダーは、如何にして今後の調べを續けるかと思案しながら、クツシヨンに靠れて眼を瞑つたが、今度偶と睜らけば何事ぞ、三個の銃口が彼の額を覗つて差向けられてゐる。「手を舉げろ！」

フアンダーは勢ひ手を舉げない譯に行かなかつた。そしてこれも所持品一切捲き上げられて了つた。覆面の汽車強盗！ 何といふ大膽な恐ろしい奴等だらう。二人の被害者——探偵と老紳士とが、お互に氣が着いて手を取合つた時には、賊は各自に窓から飛び出して、谷間の方へと逃げ延びてゐるのであつた、その群れの中に裾を捲つて同じやうに逃げて行く、美しく着飾つた女が一人あつた。

「お怪我がなくて何よりでした、どうも甚い奴等です、浮かり氣を許したので甚い目に逢はされましたよ」

とフアンダーは紳士を慰め顔に云つた。

「え、彼奴！ あんな奴とは思はなかつた……」

と老紳士はまだ胸の動悸も鎮らない様子である。その時フアンダーは氣が着いて、

「おゝ、やがて上り列車が来る時分だ」

と慌て、云つた。

鎖を切り離された彼等兩人の客車は、墮力に依つて一時大勾配の中途まで上つて行つたが、今や車輪は逆に勢づいて、坂をずる／＼下りてくるのである。探偵は促し立て、紳士を客車から連れ出した、赭土の崩れる崖を這ひ上つて、辛くもレールを眼下に見下ろした時、フアンダー探偵の慌てて叫んだ事が目前の事實となつて現はれた。今しも隧道を出て来た上り列車は、勾配にかゝると等しく火力を強め、機關も割れよと漕ぎ上つて行く

……此方は捨て小舟になつた客車一個、下り坂の速力をもつて下りてくる……それが坂の途中で衝突した。必然免れることの出来ない運命であつたけれど。

屋根は微塵に碎けて飛び、車體は悉く崩壊れて散亂した、濛々たる土煙りの底からは、此の世からなる地獄の阿鼻叫喚が、手に取る如く天日を罩めた。

フアンダーと老紳士とは、その身が危険を逃れた喜びよりも、目前の此の惨状に胸の潰れる思ひがした。

海岸の活劇

パリのとある郊外に人氣なきを伺つて自動車を停めたのは、汽車強盜を働いて逃げ出して来た一團である。

こゝで獲物を調べる段取になつたが、老紳士から奪つた方は現金千八百フランが重なもの。若い乗客の方からは探偵の秘密書類が出て来た。

「何だ、彼の野郎探偵だつたのか、さうと知つたら殺してくるんだつた」と云ふ聲は誰あらう、覆面を脱つたフロントマである。

「だが好いものが手に這入つた、これを種にヂューヴの奴を誘き出し、あの若造もろとも、可愛さうだがお陀佛だ」

フロントマの顔には、凄いく決心の色が漲る。やがて一同凱歌を擧げて此處を出發した。

途中で、フロントマは郵便局に立寄つた。打つた長文電報はファンダーの名を欺つてヂューヴに宛てたもの、即ち、「不思議なる女性の偵察は成效せり、今夜七時を期し、アルセル商會の裏手なる海岸へ御潜行仰ぎたく賊徒の逮捕容易なるを信じ候」云々の意味。今一つはヂューヴからファンダーに宛てた電報で、やはりこれと大同小異の文意、要するに兩人の探偵を誘き出さうと云ふ、悪辣な計畫に違ひない。

その日も暮れた。

アルセル商會の裏手は、微かに霧の漂ふ海上から、仄のりと水明りの差す眺へ向きの暗闇である。月もなく、燈火一つもこゝらには點つてゐない。唯だ曇々と脊丈に餘る麥酒樽が波打際まで轉がつてゐた。

七時の刻限になると、ヂューヴ探偵は身拵を固めて、此の海岸に姿を現はした。素より不意の備へに手怠りはなく、身體を樽の蔭にして、フアンダーを探して忍び寄つた。フアンダーもその通り、前後見配りながら樽の蔭を待ちこち這ひ廻つてゐた。

丁度樽の切れ目で二人は、思ひがけもなく鼻を突き合した。餘り吃驚した機みにフアンダーの持つ拳銃の引金が突然落ちた。

銃聲一發！

「危ない！ 誰だ？」

「おや」

「おやじやない、フアンダー君じやないか。一體どうしたんだ？」

「貴方、手紙を下すつたでせう、それで私やつて来たんです……」

「おい、君の方が呉れたんじやないか……」

とは云つたが、流石名探偵。

早くも自分等兩人は、賊の罠にかつたのではないかと察知した。で豫じめフアンダーにもその意を傳へ、

「これは、油断がならないよ」と云つた。

途端に、耳を掠めて飛び來つた一弾。續いて諸々方々に打ち出す盲ら弾は、刻々に兩探偵を危険にする……賊の一隊は、呼子の合圖と共に、樽と云ふ樽の寸隙から、拳銃の覗ひをつけながら、一齊に立ち上つた。

暫らく抵抗したが賊は多勢を頼んで、四方から兩人を包圍してくる。そ

の中、樽から樽に仕掛けがあつたと見へて、所々に轟然たる火薬の爆發する音が、煙りと共に兩人の前途を包んでくる。デューヴは矢庭に一個の空樽の内に、身を躍らして飛び込んだ。フアンダーもこれに續く兩人は煙りに噎せて呼吸の根も留まる程だつた。

危険は刻々に迫つてくる、デューヴの機轉で、その樽を横に轉がした。兩人は犇かと抱合つたまゝ、轉がる樽にその一命を委すの他はなかつた。幸ひにも樽は波打際までまろんで行つた。が賊の方には誰一人これを知る者はない、兩人は樽からやつと這ひ出して、抜手を切つて前に泳ぎ出した。今や此の海岸一帯は、煙々として物凄い光景を呈するに至つた。

焼 け 木 杭

今までは賊徒の一味、一ツ端し毒婦で顔の通つた、ベルサム夫人のその後はどうなつたか？

幾らフアントマの恐ろしい誘惑があつたにもせよ、その身の地位と名譽とを、彼女は今まで何と思つてゐたか。併し戀と慾とに墮落した此の盲目の女にも、遂に良心の芽の伸立つ機が來たものか、一念發起して、尼寺に隠れた。それは彼女が畢世の奸智を振絞つて、フアントマを牢獄から救ひ出した間もなくの事である。

裏面には救ひ出されてからのフアントマが、夫人に寄りつかなくなつたと云

ふ事も原因の一つだ。何方かと云へばフアントマは、決して夫人を愛してゐるのではない、戀に寄せて唯だ單に夫人を方便に使つてゐるに過ぎない。今まで、身分が身分、金はあり、縹緞はいゝと云ふので、惡事に使ふには適當こいの女だ、位にしかフアントマは思つてゐない。

夫人は今更ら情夫の薄情を恨んだが、兩人の關係は次第に疎々しくなるばかり。こんな時に人間は、眞性になつて生れ變るか、益々墮落の淵に沈むか何方かである。幸ひに夫人は、眞人間になる方だつた。妙に此の世が面白くなつて、急に思ひ着いて修道院に身を寄せた。其處には人生の快樂はない華やかな戀も、宴も、恐ろしい罪も、慾もない代りに、あらゆる不自由と、清淨と、信仰とがあつた。彼女はその中に全身を浸して、黒

い頭巾に日影を避けて暮してゐるやうな、慎ましい尼さんになりたいた願つた。

或る日、ベルサム夫人は寺院の窓際に靠れて、今日も在りし昔の罪の迹に、良心の責苦を受けて悲んでゐると、こそ一通の手紙が届いた。見るとそれはフアントマからである。夫人は暫らく躊躇つた後、思ひ切つて封を披いた。

「最愛のベルサムよ」と云ふ書出しには、夫人の心が強く惹かれた。して見ると彼女の決心はそんなに薄弱なものであつたのか……しかし夫人としてはそれも決して無理ではない。

「御身は何か誤解してゐるのではないかと思ふ、私は何しに御身を見棄て

るやうな事をしよう。私を信じてくれ、そして昔のやうに親しい仲になつてくれ……」

と書いてある。要件としては、

「御身の空家で今夜、十二時を期して逢ひたい事がある。必ず待つてゐる」と云ふのだ。

夫人の心は暫らく迷つてゐた。あの悪性男、又妾をダシに使つて何か目算むつもりなのか……と男を憎む心と愛する心とが、渦巻のやうに胸に溢れる。しかし結局、弱いのには女心である。その一通の手紙に曳磨られて掟ての殿しい尼寺を、夜密そりと潜び出た、再び潜るまいと誓つて出たもとの棲家——今は空家同様の侯爵邸へ、その夜更けて裏門に自働車が停

つた。黒いベールに顔を包んで下りて出たベルサム夫人、植込の間を抜けて案内知つた自分の部屋に入つて見れば、一ヶ月以上誰も訪れなかつた卓上や床は埃だらけの體である。

一と足先に來て待合せてゐたフロントマは、物蔭から出て來て、夫人の手を取つた。

「妾は縁が切つて貰ひたい」と夫人は強い言葉を云ひながら、男の接吻には心に残る未練があつた。がフロントマにどんな魅力があり、如何なる甘言を以てしたのか、とうとう兩人の關係はもとの鞘に填る事になつた。焼け木杭とよく云つたものである。

それからと云ふもの、夫人は一週間に一度位尼寺を潜び出て、危ない逢

瀬を重ねてゐた。フロントマは、何か又目算むことがあると見へて、その空家に深く身を隠してゐた。

迷宮の家

故ベルサム侯爵の住居は、近頃賣り物になつて出てゐる、耳の聾いた番人の老爺が一人ゐるばかりであつた。

或る日、家の内が見せて貰ひたいと云つて尋ねて來た、二人連れの紳士がある。服装が少し違ふけれど、倣ふべくもないヂューヴとフアンダーとである。彼等は早くも、フロントマとベルサム夫人とが、此の空邸を利用して密かに悪事をたくらんでゐる事を察知した。そこで賣り家となつてゐ

るのを幸ひに、檢分旁々家の構造を見て置かうと云ふのだ。

番人は、二人を探偵とは氣が着かないらしく先に立つて案内する。玄關の石段の下までくると、一筋の溝のやうに生々しく土の堀り返した迹がある。ヂューヴはおやと思つた。空家に地中線を埋けた迹は訝しいと思つたのである。

一體に此の家は、奇怪な構造になつてゐる。殺されたベルサム侯爵が餘つ程の變り者であつたか又はその前からの設計であつたか、兎に角數奇を凝らし工夫を積んで古代ギリシヤの建築風に倣つてゐる。二人の探偵の鋭い眼光は、階段から廊下、鳴居から天井と云つたやうに、残る隈なく觀察した。

「妙な室明りですね」

とフアンダーが唸いた。

ヂューヴは頷いて、「ムウ、、、」と腕を組んだが、恐らく此の空邸に早晩惹起すべき何等かの不祥事を思ひ浮べたのであつたらう。

やがて導かれたのは、もとベルサム夫人の常住した一室、今では一週間に一度の媾曳に宛がはれた部屋である。探偵が何気なく此處に入つてくるとすぐ、眼に留つたのは傍らの卓である。見よ！卓上に堆かるべき埃がその迹すら留めずして綺麗になつてゐるではないか。ヂューヴは進み寄つてインキ壺を手にとつた、そしてペン軸を掴んで見た。

「おや、此のペンにはインキの跡がある……しかも新らしい、生々しい跡

が……」

ヂューヴは我知らずかう叫んだ。

「おい老爺さん！」と番人に問ひかける、「お前さんは此の部屋で手紙か何か書くのかい？ そしていつも此の部屋に住んでゐるのかい？」

「私……が御戯談を。此室は夫人のお部屋だったので、夫人がお寺へお移りになつてからと云ふもの、誰一人此處に入つた者はありませんよ」

「ふむ、でも新らしいインキの跡が此の筆にあるじやないか」

「へー新らしいインキの跡……」

番人も呆れて、解せないといふ顔をする。

今度はフアンダーが、ヂューヴの肘を突ついで、その足元を指した。其

處には二尺ばかりの風窓が開いてゐる。棧を閉めると普通の壁板みたいになる。番人の説明に據れば、此の窓は最も巧妙を極めたもので、窓の内部は温突様になつて地下室に通じてゐるのださうだ。

「どうだらう、その地下室を見せて貰へまいか？」とヂューヴが云つた。

「へえそれは………」と番人は少し考へて、「何しろ先の侯爵様の御自慢なんでございましてからねえ……」

やがて彼等は幾つかの階段を下り、幾つかの室の前を通つて、鐵の扉に突當つた。その嚴重な扉を開けて入ると、石段があつて凡そ三十坪ばかりの薄暗い土間となる。此處が即ち地下室である。見れば石材や鐵板などの耐火質のものばかりで造られてあるのだ。傍らの大きな竈は一體何に使用

するの？ その巨きな天水桶様の水甕は何に使用するの？」

竈の内はその廣い烟り口が、くの字に曲つて上に抜けてゐる、抜けたところ为例の風窓になると云へば誰しも驚かう。それから水甕の方は周圍が一丈にも及ばうと云ふ巨大なもので、ヂューヴが足場を辿つてその内を覗くと、波々と湛へた水中に逆さに一つ空瓶が漂つてゐた。取つて見たが別に異状はないからその儘にして置いた。

探偵が此の地下室を見た時の感じは實に異様であつた、迷宮に踏み込んだと云つても不思議はこれ以上ではあるまい。

やがて彼等は此の空邸を出て行つたが、唯だ一つ物置を見なかつたのは、彼等の大なる手落だつたと云はなければならぬ。

その夜の警戒

十一時が打つてから大分間がある、界限間そりと更け渡つた頃、裏門に自動車^{自動車}が来て停つた。何かの合圖^{合圖}があつたと見へて、内から出迎へたフロントマに手を取られながら、ベルサム夫人は、密々と身を隠して了つた。しかしその後からすぐ、二人の男の影が見へ隠れに跟いて行つたとは、流石^{流石}のフロントマも氣着かなかつたらう。

部屋に入るとフロントマは、窓と云ふ窓をすつかり閉切つて、腕を拱いた。苦痛の色が現々と顔に鈍染む……

「貴方、ねえ何うかなすつたの？」

「どうもしないが」と男は眉を擡めて、「近頃馬鹿に俺を、あのヂューヴの奴が附け廻してゐるよ、あの野郎、どうして呉れよう！」

「え、ヂューヴですツて？」

「うむ、それで少し思案してる事があるんだ」

と云ひながら、ふと風窓に眼をつけた。閉め切つた筈の窓が開いてゐる。彼は靴の尖で棧を引き寄せて、話し続ける。

「ねえ御承知ですから、私を連れて逃げて下さいな、さうしたらお互に安全じゃありませんか」と夫人はもう怖氣立つてゐる。

「馬鹿あ云へ！俺は此の巴里にゐるから、安全なんだ、何百人と云ふ俺配下が、手足のやうに巴里の市に動いてるんだ」

足もとの風窓がまた開いてゐる、そして仔細に見たらそこに二つの顔が覗かれたかも知らぬ。知つてか？知らずか？フアントマは片手を舉げて夫
人を制した。

風窓に隠れて兩人の密談を聞き取つた者が誰だらうとは、凡そ想像に難くはない。フアントマの扉を開けて出た氣勢に、悟られたかと件の二人は例の温突様の掛梯子を駆下りて地下室から外に飛出した。フアントマは一應地下室を取調べて、小首を傾けながらもとの部屋に戻つて来た。

「ひよつとしたら探偵の奴、此處を嗅ぎつけてると見へる。よし、それなら俺の方でも考へがある——」

「考へッて？」

「奴等の裏を掻いてやるのさ」

その翌日の夕暮だつた、フアンダーは呼ばれてヂューツの邸宅にやつて来た。

「今夜あたりは、向ふで復讐してくるだらう。ゆふべは確かに悟られて了つたと思ふからねえ」

「復讐？つまり此方の裏を掻かうツてんですか？どう云ふ方法で」

「それは分らない……、があの地下室に飼つてあつた動物、ね、そら、あの物が今夜あたりは復讐の手先に使はれるんじゃないかと思ふ」

「でも、まさか……」とは云つたが、何を思ひ出したかフアンダー探偵は、

急にブル／＼と身慄ひをした。

夜もかなり更けたところで、ヂューヴは奥から籐製の大トランクを運んで来て、自分の寢臺の後ろに置いた。そして自分は寢卷の上から妙なものを取出して身體に着けた。「妙なもの」だけでは分るまい、フアンダーがおやく／＼と呆れ返つて見守つたも道理である。丈夫な象皮で造つた腹巻様のもの、肩から腕にかけても巻けるやうになつてゐる。そして、牙のやうな針が一面が植へてあるのだ。

「さあ、我々はかうして警戒するのだ」

とヂューヴは云つた。

「それで私は？」とフアンダーは心配相。

「君は、そのトランクの内に入つて寐てくれ給へ。少し窮屈だが……しかし何時どんな事が擡つても飛び出しちやならんよ、僕が（御用ツ！）と聲をかけるまでは。いゝかね」

間もなくヂューヴは寢臺へ、フアンダーはトランクの内へ身を潜ばして、愈々賊の復讐を待受けることになつた。

果して如何なる事件が擡るだらう？

蟒の毒氣

それから二三時間経つた。

フアンダーは神経が興奮して寐着かれなかつた。ヂューヴ氏はどうした

かと耳を澄しても、寐息一つ聞への様子では、やはり寐入つてゐるのではないらしい。

すると丁度その時、一臺の自動車影のやうに黙つて奔つて來た。甚だ不思議な自動車である。停つたところはヂューヴの寐室のすぐ窓の下！

ヂューヴはその物音にさしてはと寐ながら身構へした。

一陣の腥い風！カーテンの裾が不氣味に動いた、と思ふと、細目に開けた窓縁から帯のやうに長々と這ひ下つて來た蟒！丈の長さ一丈にも餘る恐ろしい怪物が、その爛々たる眼を裂いて、今やヂューヴ探偵の寢臺の足にと巻きついた。

今にも「御用！」の聲がかゝるか、と、トランクの内ではフアンダー探偵

氣を揉んでゐると更にヂューヴの合圖がない。その中何事か頭の上で恐ろしい物音がし出した。

寢臺の上ではヂューヴと蟒との格闘が初つた。例の象皮の腹巻の上を二周ほど締めつけて、焰々たる毒氣と共に、今やその鎌首をヂューヴの顔に襲はんとする危機一髪！探偵の苦しい呻吟が我知らず唇から漏れた時フアンダーは無我夢中にトランクの蓋をはね退けた。途端に卓上から落ちるランプの音！これに勢ひを得て起つ上つたヂューヴは、例の皮衣の鋭利な針で、反對に蟒の身體を締めつけた。

フアンダーが、やつとランプを探りあて、燈火を點けた時には、蟒はもうすく／＼と寢臺から這ひ上りて、もとの窓縁に姿を消さうとしてゐた。

戸外に待つてゐた自動車はそれと同時に何處ともなく立去つて了つた。
 デューヴとフアンダーとは、暫らく茫然して互に顔を見合せるばかりである。

鱗の毒氣にあてられたものか、デューヴ探偵はその夜から直ぐ發熱してドツと寝着いて了つた。

併し賊の復讐がこんなに明瞭に、悪辣に報られたのであるから、そのまゝに放抛つて置くワケにはいかない。翌朝になると警察に通知して巡査若干名の出張を依頼した。これから愈々賊の巢窟——ベルサム家の明屋口と手を廻はすことになるのである。

悪魔の勝利

夜の白々明けに、探偵と警官との一隊は明屋の前後を犇々と取圍んで號令一下、手ぐすねひいて機を待つ。

機敏なるフアントマは、既に斯くあるべしと察知して、頭からスツポリと黒装束に身をかため、家の隅々にも残るところなく最期の準備をととのへ、大支關の前に仁王立ちに突ツ立つてゐた。

植込が動いた。

探偵が忍び寄つて來たのである。

「馬鹿野郎！ 手前等の一筋繩を頂戴するのは時機が早いや。出直してこ

い頼馬野郎！

こゝまでお出で、甘酒進上と毒づいて阿々と豪語大笑したフロントマは暫らく夕關の上から捕手の氣勢を候つたのち、一躍、飛鳥の如く室内に姿を隠した。ヂユーヴ探偵の下知があつて、それツと警官の群れが亂入した時には既にフロントマの行衛は知れず。

黒装束のフロントマは物置小屋に潜伏したのである。室といふ室にはダ INAマイトの仕掛があつて、邸内爆發の大装置は、此の物置小屋に各方面から引いた導火線の、スキツチを一つひねれば萬事了るのである。

十数名の警官は早や玄關から階段、廊下から二階にと馳上つた。が兇漢の姿は天に隠れたか地に潜んだか、皆くれ所在が分らない。室内に迂濶に

飛び込んでも、どんな仕掛があるか知れぬから、浮かり足も踏み出せない。どうしたものかと流石の名探偵も腕こまねいて思案してゐると、廊下一つ隔てた扉の向ふから、「呀！出た！」と叫んだ警官の聲！續いて劇しい足音。

今しも黒装束のフロントマは、一方の血路を切り抜いて階段を飛び下りて来た。彼の志す唯一の逃げ路は地下室である。獵犬に狩り出された猛獣のやうに、彼は恐ろしい勢ひでその鐵の扉を押開けるや否や、内から丈夫な門を當がつて、用意の空瓶を一本唇にくはへた。

彼はその空瓶を何にするだらう？

讀者諸君の記憶にあるところの、彼の巨大な水甕！ 満々と湛へたその

中に一個の空瓶が尻を上にしてブク／＼浮いてゐたことをお忘れではあるまい。兩探偵が此の地下室を見分した時、取上げて見たがその空瓶には何の仕掛もなかつたこともお忘れではあるまい。仕掛はなかつたが、その水甕よりも深い々々魂膽は、こゝに彼フロントマの畢世の機智を現はすこととなる。

見よ、彼は空瓶を手にして甕の中に身體を沈めた。その黒装束も防水質の織物であつたことは疑へない。水中には依然として空瓶が浮揚してゐる。恐らく彼は長時間に耐え得る呼吸作用を、その空瓶に托したのであるまいか。

警官は遂に扉を破つて地下室になだれを打つた。チェーン探偵の炯々た

る眼光も遂に此の空瓶の魂膽には氣着かなかつたものか、彼等の注目は期せずして例の大竈に蒐まつた。薪は山と積まれた、竈口は早や煙々として燃え出したのである。その中にフロントマが潜んでゐたのなら、造作なく稀世の悪漢も逮捕できたであらう。が、中から火氣と煙とに噎せて這ひ出たものは、意外！意外！身のたけ一丈にも及ぶ鱗であつた。

彼の煙口となるべき二階の風窓から狂ひ出た鱗は、警官の手に依つて、容易に退治されて了つた。しかしそのために、幸運なるフロントマはタンクから飛び出す餘裕が與へられた。

濡れ鼠のやうになつたフロントマは、逸早く例の物置小屋に逃げ込んだ。スキツチを一つひねれば俄然とした起る大音響！ 天地晦々、此の宏壯が

奇怪なる大家屋は、火山のやうになつて爆發した。が、幸ひにも警官等は危険の迫る間一髪、窓から飛び下りて辛々に虎口を逃れることが出来た。此の恐ろしい瓦壊爆發の濼々たる煙火の何處よりか悪魔の勝利を祝ぐ聲響き渡つた。噫、流石の名探偵も遂に長蛇を逸したのである。――

第三 不思議の指紋

トンビに隠れた義手

近頃ナンダールと云ふ銀行家が巴里市内の料理店といふ料理店、あらゆる遊里の巷に出入して豪奢を極めてゐる。打見たところ何さま一流の銀行

家ほどあつて金費ひは粗放すぎる位に綺麗だし、押出し、服装共に堂々たる富豪の風采を備へてゐる。

これで無事に済めば何のことはないが、近頃世間の物騒さが並大抵でないだけ、警察側――殊に一流の探偵などは社會の各方面を物色して、何かな悪漢逮捕の手蔓を得ようとする。勢ひ金費ひの荒い、日頃不品行の間がその筋の眼に留まるといふことになる。

そこで最近探偵に注目され出したのは、その銀行家ナンダールである。果して彼は怪しむべき人物であらうか？

第一に眼をつけたのは大探偵のデューヴであつた。彼はフアンダーと協力して専らその偵察に力を注いだ。彼等の行動の機敏なる、大概の當りの

ついたのはそれから四五日したやうな頃であつた。當りとは何？ナンダールの正體や何？

晝と夜とを間違へたやうな、大食堂の綺麗びやかさ。五十燭、百燭の電燈は大理石の卓、金の額縁、石豪像、彩華燦爛たる天井と床、流行の粹を蒐めた男女の服装などに照り榮へて、げに天上の歡樂境はこゝかとも領かれる。あたりには、えならぬ香水の薫りさへ立ち罩めてゐた。

今しもナンダールは、とある食卓に控へて左右に絶世の美姬を花のやうに侍らせ、強烈な甘露の酒を呻つて陶然としてゐた。

いつの間にかヂューヅとファンダーとは、此の料理店の中に入り込んで

何喰はぬ顔で蕩兒のお仲間入りをしてゐるのだ。が酒の薫りが益々深くなればなるほど、歡樂の頂上に近づけば近くほど、彼等二人の眼は益々鋭く心は益々汚へて行くのであつた。

夜も大分更けた頃、一人の肥満の給仕人が盆に一葉の名刺を乗せて、ナンダールのところに持つて來た。

「え、唯今此の方が貴方にお眼にかゝりたいと云つて、立關でお待ちになつてゐらつしやいますか——」

名刺を取つて眺めたナンダール、悪猾さうな眼で暫らく四邊を見廻したのち、不意に起上つて傍らの女の耳に囁いた。

「些と逢つてくるから、遊んでお出で……何直き歸つてくるよ」

彼はさう云ひ棄て、トンビと帽子とを持って玄關に出て行つた。その名刺が若し、ヂューヴの名でなかつたら、或は「直き歸つて」來られるかも知らんが、玄關には彼のために大きな網が張られてあるのだ。それにしても彼は顔色一つ變へなかつた。大膽と云へば大膽である。彼は夜會服の上からそのトンビをするりと着流して、シルクハットを冠つて揚々として玄關に出て行つた。

玄關には云ふまでもなくヂューヴ、フアンダーの兩探偵、扉の外に別れて待ち構へてゐる。

「御用！」

の聲がヂューヴの唇から迸つた瞬間に、ナンダールの兩腕はトンビの

上から嚴かり兩人の探偵に押へられてゐた。そして町の方にグン／＼連れて行かれた。

丁度曲り角のやうなところだつた。今迄無抵抗に引つ張られて來たナンダールは、隙を覘つて身體をひねつた。と、探偵は折重つてナンダールを押へつけた。

併しトンビに覆はれたナンダールの身體は、トンビと兩腕とを残したまま、巧みにアスファルトの街路から消へ失せて了つた。探偵の押へてゐた腕は、企みも企んだり、護謨の義手なのであつた。氣が着いて地團太を踏んだ時には、ナンダールはお詔へ向きにやつて來た自動車に投じて、深夜の巴里をいづくともなく逃げ去つたのである。

ナンダールの正體が何者であつたかは、その危機一髪の巧妙な手段でも知れる、賢明なる讀者諸君の既に感着かれたところだらう。

古着屋の馬鹿爺

巴里の場末の薄汚ない裏町に、一軒の古着屋がある。晝も陰氣な光線が屋根裏から射して、狭い店に取り散らかした古着、古道具に鈍い陽の縞を織つた。その縞のなかに埃が舞つてゐる。

店の主婦はもう六十年配の強慾な老婆だ。その癖はでな辨慶縞の服なんか来て、皺の間に白粉を塗り込んで、男妾を養つてゐるといふ評判だ。場所が場所だけに、得意といふのは揃ひも揃つて、薄汚ない乞食のやうな

男女であつた。お常連は屑屋だが、随分如何はしい人相の男が、如何はしい品物を何處からか持運んでくる。

此の店にいつの頃からか、一人の老爺が雇はれてゐる。自分の名前も、生れ故郷も知らないといふ人物だ。薄呆で、失心家でいつも、青澗を垂らして、云ふ事もまるで呂律が合はない。尤もこんな人間だから、此の不思議な暗い裏面の潜むらしい家に、不思議を不思議とも思はないで雇はれてゐるのだらう。

今日も夕方から、二人の男女が大きな包みを擔ぎ込んで来た。主婦は包みを解かせて内容を調べると、その風體で、こんな店に持つてくるやうな品物ではない。衣類と云ひ、金銀製の道具と云ひ、仲々金目のものらしい。

だが主婦はそんなことは一向平氣だ。さんぐ安値にこき卸して、賣手が泣面を搔くほど些少の金錢を呉れてやつた。そんな値でも賣らなければならぬとは、賣る方もよく／＼他に向け口の無い品物と見へる。

その中今來た客と一緒に、主婦は部屋の隅で鬪花をやり出した。無論金錢をかけてゐる。戶外はもうすつかり暗かつた。例の馬鹿爺は、隅にうづくまつて古着を片付けてゐる。蠟燭の灯はチラ／＼骨牌の上に揺れてゐる——と、店の潜戸が外から開いて、一人の脊廣の男が入つて來た。

「おや、ニーべさんかい？」

と主婦が年甲斐もなく、相好を崩して迎へたも道理、此の男は即ち老婆さんの可愛い情夫、男妾のニーべであつた。何でも監獄の看守をしてゐる

さうだが、どうせこんな所に入出入をする男だ、何をしてゐるか知れた者ではない……………。

「こんな品を、置きつ放しじや困る。若し踏ん込まれでもして御覽、すぐ發れるじやないかね」

「おゝさう／＼、早速藏ツとくとせう」

老婦は、馬鹿爺を叱り飛ばして、山のやうに積まれた古着や古道具の始末をさせた。さて何處にそれを始末するかと云へば、床の下である。主婦は蠟燭の灯を高く掲げた。ニーべは床板をグイと撥ね上げた。驚くべし、其處は地下室になつてゐる。

馬鹿爺は古着を脊負つて眞暗な石段を下りて行く、あとからニーべも續

く、實に不思議な光景である。主婦は床板をもと通りに卸して、何喰はぬ顔で又骨牌をやり出した。

無實の罪？

花の噂さの高い、陽春の巴里。四月三日の朝まだきである。

今度の美術展覽會で評判を取った、少壮美術家ジャック・ドロンの家では、早起の下女が、牛乳の瓶を戶外から持運ぶやら、はたきをかけて掃除を始めるやら、近所合壁お構ひなしに立働いてゐた。主人のドロンはまだ寢室から出て来なかつたが、下女は部屋々々を掃き出して、いつもドロンの勉強の部屋、兼應接室と云つたやうな廣間に入つて来た。何心なく卓の

前まで来て、カーテンを引絞ると朝の光りが室内に潮のやうに照り込んだ。と、その光りに現々と眼に映つた一つの光景！

「ワツ！」と叫んで下女は早腰を抜かした。

下女が驚いたも道理、寝てゐる筈のドロロンが、卓の上に眞蒼になつて倒れてゐるのだ。直ぐその右の安樂椅子には美しく着飾つた妙齡の若い女が既に呼吸も絶へ果て、冷めたくなつてゐる。

下女は早速交番に訴へて出た。

警部、巡查、警察醫、探偵などがぞろぞろドロロン家にやつて来たのは、それから間もなくであつた。ドロンの方は魔酔薬か何かで昏酔してゐるだけだつたから、早速手當を受けて正氣が着いた。

「おい、此の婦人を知つてゐるだらう？」

と訊ねられて、ドロンは氣疎さうに四邊を眺め廻したのち、安樂椅子の上うへに眼めを注そいだ。彼かれには何なにが何なにやら一向解かうげせないといふ、顔かほつきである。

「おゝこれは、ウエブル伯爵の令嬢！」

ドロンは叫さけんだ。

「一體これは何うしたと云ふのです？ 何うしたといふのでか」

ウエブル伯爵家と云ふのは、かねてドロンの妹のエリザベットが出入してゐる家で、令嬢はエリザベットの親友であつた。

その令嬢が既に締切れて死んでゐるのだ。ドロンは驚きの餘り口が利けなかつた。警官は令嬢の死骸を調べ初めた、隠囊から出て來たのは一通の

書簡紙で、それには「妹の作品を御覽に入れたいから、お遊び旁々お運び下さい」といふ招待状であつた。しかもそれがドロンの手蹟に違ひないのである。

「幾ら私の名前があつても、私は一向知らないんです」

ドロンの辯解は役に立たなかつた。證據が擧つてゐるのである。彼は探偵の調べに従つて、昨夜までの彼の行動を陳述したが、決して令嬢を招待した覺へもなく、昨夜令嬢を迎へた覺えもないと云つた。

しかし事實は其處に横はつてゐる、よしんば彼の行爲でなからうとも、嫌疑は當然彼に來なければならぬ。

彼は遂に謀殺犯の被告として引致されることになつた。検事局の取調べ

も、現場の取調べと同じやうなものだつたが、結局彼は未決犯人として、
 恐ろしい二十九號の檻倉に打込まれて了つた。
 此の事件は、今後如何に展開するだらう？

大探偵ヂューヴ終

大正四年七月十五日印刷
 大正四年七月二十日發行

活動寫眞
 叢書奥附

大探偵ヂューヴ

不許複製製

定價金拾五錢

送料金四錢

發行者

芝居と活動社

右代表者

吉田庄太郎
東京市日本橋區馬喰町二丁目六番地

印刷人

押谷長松
東京市麹町區飯田町二丁目三十三番地

印刷所

兵林館印刷工場
東京市麹町區飯田町二丁目三十三番地

賣捌所

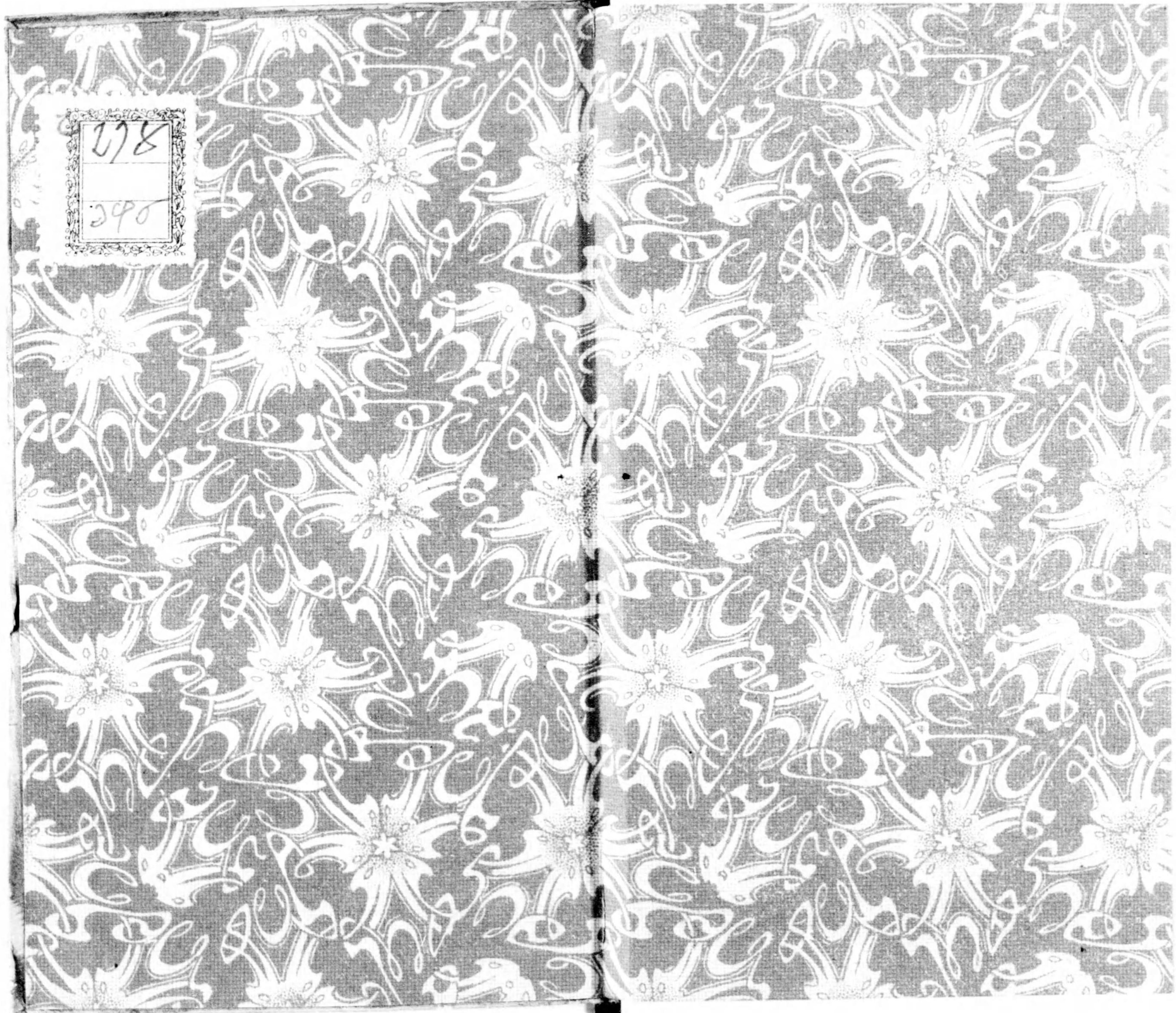
東京市日本橋區馬喰町二丁目六番地
 振替口座東京三〇一五四番

芝居と活動社

Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.

Blank page with faint bleed-through text from the reverse side, including a rectangular box at the top and several lines of text below.

278
290



終

SHIBAI
TO KA-
TSUDOSHA

